グルニエ・サン・ラザール通りから1912年にここに店舗を移した。当時は工場と研究所も隣接していたそうだ。

Comptoirs authentiques

変わらないパリに会いたくて。

古いカウンターのある店へ。

{ *La Maison du Pastel*
ラ・メゾン・デュ・パステル }

ランビュトー通り。果物屋や総菜屋が連なる商店街にふいに古めかしい門が現れる。はげかけた赤い文字で「PASTELS」とある看板をたしかめ、薄暗い石畳を進んでゆくと、つきあたりにクリーニング屋と肩を並べるようにして、その店は寡黙にたたずんでいた。

19世紀印象派の時代、注文の多い画家ドガの要求に応えられた、ただ一軒のパステル工房として知られる名店にしては意外なつつましさだ。白い木枠の扉を開ける。ギッときしむその音が内側にこもっていた静謐をゆさぶって、重厚なカウンターに立った髪の短い女性がこちらを向いた。昔のパリには、こういうカウンターごしの対面形式でものを売る商店が多かった。

彼女、イザベル・ロシェさんはこの店の4代目当主でフランス全土でふたりきりになってしまったというパステル職人でもある。店を開けるのは週に1回、木曜日だけ。ほかの日はパリ近郊にある工房で製作に没頭する。

この店のパステルは、色素顔料をつぶし、色を調合し、結合材を加えて練るところから一本一本が手作りである。パステルは、そのまま手にもって描いたり、削って粉末にして指やスポンジでぼかしたりして使われる画材だが、硬すぎず、折れがたく、色調は鮮明にして深く、密着力にもすぐれたこの店のパステルを「芸術家の6本目の指」と呼んだ人もいる。

photo:Yasutomo Ebisu, Yurie Nagashima(p37上), Takeshi Miyamoto(p38～41)

創業者のアンリ・ロシェは化学者だったそうだ。絵画に造詣が深く、恩師のパスツール博士にパステル職人を紹介された縁で製造に関わるようになり、研究を重ねてついには、画家たちが求める理想のパステルを完成させた。気難しいドガもロシェには心を許したという。光の輝きと層をそのまま画布に留めたような、あの踊り子の作品群も、ロシェのパステルなしには実現しえなかったのだ。

医者であった息子アンリが事業を引き継いだ1925年頃には、色数は1650色にも達し、そのコレクションは1937年のパリ万国博覧会で金賞を受賞した。しかし、大きな被害を被った第二次大戦以降、店は縮小の一途をたどっていく。色数をへらし、パステルの製造方法も一族のみに伝える門外不出のものとして、アンリの死後は、長女が経営を、ふたごの次女と三女が製造を引き受けていくことになる。

「私は、その大叔母たちから店を継いだんです」

イザベルさんは三姉妹から見れば年の離れた従姉妹のような存在。長女が亡くなり、残されたふたりも80歳という高齢に達したとき、ロシェ家の遺産である知識と技術を託す後継者として一族のなかから抜擢された。

イザベルさんは、まだ26歳だった。理系のエリートが学ぶ国立土木学校を卒業してヨーロッパ有数の石油化学会社に就職、優秀なエンジニアとして将来を嘱望されていたが、同時に人生に迷いはじめているときでもあった。

「私はただ算数が得意だっただけ。フランスには算数が得意な子供が進む道として、国立土木学校からエンジニアへというお決まりのコースがあって、私はそのレールに乗ってきただけ。でも（大叔母たちから話がある）少し前に、バカンスでタンザニアの大自然の中にいるときに啓示のように突然わかったことがありました。それは私は空っぽなんだということ。私はずっと、ほんとうの人生を先送りにして生きてきてしまったんだと」

工房には18歳のとき一度だけ訪れたことがあった。埃が舞い、古い時間がしみついて、あまり長居したい場所ではなかった。

「でも店を継ぐと決めて、あらためて訪れてみるとすぐにそこが私の場所だとわかりました。どうして気づかなかったんだろうって。それからは大叔母たちについて必死で学びました。はじめて顔料を練ったときの楽しかったこと！　ずっと頭のなかだけで生きてきた私には、この手を使うことがとても必要なことだったんです」

イザベル・ロシェさん。右は店のロゴのドラゴンと麦の穂の刻印。ドラゴンは「変容」の象徴で、その昔、錬金術師が好んで使った。

右はインディゴブルー(Bleu Indigo)の、左は深紅(Rouge Carmin)の、それぞれ9色のグラデーション。

パリ南西のサン・マルタン・ドゥ・ベルタンクール村にある工房。

顔料と水をこねたペーストを、転がしてスティック状にする工程がいちばん楽しい。

パリの南西60キロの小さな村にある工房はおそろしく静かだ。すぐそばには深い森が広がる。

「ひとりで集中して作業をしていると、いつのまにかパステルのなかに自分が入っていくような気がするときがあります。ひとつひとつの動作に私以外の何かが宿りはじめるような感覚。そうすると満ちたりた気持ちになって、そう、一種の瞑想状態」

工房は私の修道院のようなものかもしれないとイザベルさんはいう。

2000年に正式に店を継承してからは、大叔母たちの加齢とともにへった色数を少しずつ復活させていった。なにしろイザベルさんがはじめて店に立ったとき、赤が1色もなかったのだという。顧客もめっきりへっていたが、職人としてのイザベルさんの腕が安定し（もともとが技術者。その上達の早さはいうにおよばない）、この店らしい微妙なニュアンスが再び店頭に並びはじめるにつれて客足は戻った。なかには「ロシェのこの色がないと絵が描けなかったんだ。君はぼくの救世主だよ」と喜んでくれる画家も多くいたのだという。

「でも、ロシェのパステルを救ったことで、いちばん救われたのは私。いまは毎日が贈りもののよう。パステル画を描く人もへりつづけて、経営はもちろん簡単とはいえません。それでも、やりつづけなければいけないことがあるのだと思う」

現在のコレクションは基本色が63色。そのそれぞれに白を段階的に足した9色のグラデーションが用意されているから総数は567色におよぶ。

アンリ・ロシェの時代からつづく色もあれば、イザベルさんがインスピレーションを受けて調合した新色もある。それらは基本色ごとに木箱に詰められて（この箱も創業以来のもの）カウンターうしろの棚に並んでいる。気になる色を挙げれば、そこから取り出して見せてくれる。イザベルさんは英語も堪能なので心配は無用だ。

1本からでも買えるし（16〜20€）、何色かがセットになった箱入り（コッフル）も用意されている。

「萎えたバラ」「海の遥かの青」「フィレンツェの土」「孔雀の羽根の緑」……棚には直訳すると一粒の詩のようになる色の名前がいくつかあった。

実際はちがうと知りながらも、そんな詩の粒を背景に立つイザベルさんを見ていたら、しおれても強く香るバラの花びらや、海賊にたのんで集めた海の水から抽出した色を自在に調合し、彼女が錬金術師のようにパステルを作っているような幻想に浸りたくもなった。

ありえないことでもない。

なにせここはパリなのだから。

La Maison du Pastel
20, Rue Rambuteau 75003 Paris
☎ 01 40 29 00 67
木のみ　14:00〜18:00
地下鉄：Rambuteau　地図：① J-20

工房の扉には大叔母たちが白墨で書いた「ORA ET LABORA（祈りと労働）」というラテン語が。ふしぎなことに時間がたっても消えない。